

異文化交流とファッションデザインに関する産学連携による実践的研究

— やまぐち文化発信ショップの活動および ヘルシンキ芸術デザイン大学と山口県立大学の交流事例を通じて —

Practical Research Through Cooperation Between Industry and University on International
Exchange and Fashion Design

— The Case of the Yamaguchi Culture Lounge and Exchange Between the University
of Art and Design Helsinki (UIAH) and Yamaguchi Prefectural University (YPU) —

水谷由美子：代表* Yumiko Mizutani

岡部泰民 高島海 山崎忠道** Yasutami Okabe Kai Takabatake Tadamichi Yamazaki
新留直人 ノーラ・ニニコスキ&ピイア・リンネ*** Naoto Niidome Noora Niinikoski & Piia Rinne

This essay is concerned with 'Practical research through cooperation between industry and university on international exchange and Fashion design. In particular, it is concerned with the case of the activities of the Yamaguchi Culture Lounge and Exchange between the University of Art and Design Helsinki (UIAH) and Yamaguchi Prefectural University (YPU), mainly organized by Yumiko Mizutani, Professor of the Graduate School of International Culture Studies at YPU, who was a visiting professor at UIAH in 2002.

The following exchange activities are discussed in detail :

1. The participation of YPU Graduate School students in the 'HIMO' Fashion show at UIAH.
2. The participation of UIAH Graduate School students in 2nd and 3rd Japan Fashion Design Contest in Yamaguchi, organized by the Executive Committee of the Contest and the Christmas Fashion show, organized by the Yamaguchi Culture Lounge.
3. An exchange of Finnish fabric and Japanese Fashion design.

1. はじめに

本研究の代表者水谷は2000年度にヘルシンキ市立美術館で山口県立美術館所蔵品による「禅僧雪舟とその弟子展」が開催された時に、初めてフィンランドとの機縁が生まれた。すでに「やまぐち文化発信ショップ Naru Naxeva」を通じて開発していた雪舟Tシャツを、上記展覧会のためにバージョンアップして、ミュージアムグッズとして販売して頂くというプロジェクトを立ち上げた。山口県立美術館およびヘルシンキ市立美術館の学芸員や山口県立大学（以下YPUと記す）の井生文隆助教授そして日本人グラフィックデザイナー、ソニー・中井氏（ヘルシンキ近郊都市、ヤルヴェンパー在住）の協力を得てこのプロジェクトは実現された。

この経験から筆者とフィンランドとの交流が始まり、

学長ユリヨ・ソタマ Yrjö Sotamaa氏からの招聘により2001年秋からヘルシンキ芸術デザイン大学大学院の客員教授として招かれた。2002年4月～9月までは、東京財団による「教員の海外派遣」の奨学金を得て、ヘルシンキに長期滞在し、フィンランドの服飾文化に関する研究および日本の服飾文化や現代ファッションに関する授業を実施することを通じて、当大学の教職員や学生および地域のデザイナーとの親密な交流が生まれた。

具体的には2001年9月のヘルシンキ芸術デザイン大学（以下ではUIAHと記す）訪問を皮切りに、現在まで授業や創作において、交流を継続してきた。本論は、筆者のもとで研究室スタッフによって果たされた交流により生み出された創作活動の軌跡およびそれぞれの作品について記そうとするものである。

* 山口県立大学大学院国際文化学研究所教授 Professor of Graduate School of International Culture Studies at Yamaguchi Prefectural University YPU
** 山口県立大学大学院国際文化学研究所院生 Students of Graduate School, YPU
*** ヘルシンキ芸術デザイン大学大学院 Students of Graduate School, University of Art & Design Helsinki UIAH

この交流の目的は創作を前提としているものだが、一方通行ではなく、UIAHから2度に渡り学生を山口に招き、またYPUからUIAHにも一度学生を短期留学させるという経験を持っている。それは以下の記述から明らかになるはずである。

前述したやまぐち文化発信ショップNaru Naxevaは、1999年に産官学連携事業として始まった。特に、山口県、山口市、山口商工会議所、山口県繊維加工協同組合、本町商店街組合（山口市）そして山口県立大学大学院とが連携して、やまぐちらしいファッションと生活小物を商品開発して、山口から全国および世界へ発信して行こうという目的で、3年間事業として共同研究が実施された。ここでの研究開発の手法の一つとして異文化交流からの商品開発がある。異文化交流という事業としては、当初、山口市と約20年間姉妹都市提携を結んでいるスペインのナヴァラ州パンプローナ市との交流を実施して来ている。それ故に、フィンランドとの交流はその第2番目のプロジェクトになる。

やまぐち文化発信ショップNaru Naxevaの活動を通じて、大学と地域産業界との密接な関係が生まれ、ファッションの商品開発の販売事業の他、文化・教育事業として2000年に「第1回山口新人ファッションデザインコンテスト」が山口県繊維加工協同組合主催で行われた。そして、2001年には「第2回ジャパンファッションデザインコンテスト in 山口」と改名し継続され、2002年には「第3回ジャパンファッションデザインコンテスト in 山口」が実現された。

上記コンテストの実行委員長は山口県繊維加工協同組合・専務理事である岡部泰民が勤めている。岡部は現在、山口県立大学大学院生でもあり、地域経済の振興をも視野に入れて、自身の実践的研究課題として、当コンテストをこの3年間に着実に全国レベルへと展開させている。

筆者は第2回目と第3回目のコンテストにおける第2部を、外国人若手デザイナーの紹介コーナーとしてコーディネートし、フィンランド若手デザイナーである、ノーラ・ニニコスキNoora Niinikoskiと新留直人Naoto Niidomeを招待し作品を紹介した。コンテスト終了後には、それぞれ大学に招いて、山口県立大学の学部生や大学院生との交流が実現した。

特に、2002年度のやまぐち文化発信ショップ運営委員会（委員長：熊本守雄）の事業として実施された「ルネサンス・山口Vol. VII クリスマスファッションショー — Exchange of Finland and Yamaguchi —」（企画・演出・デザイン：水谷由美子）では、まさにフ

ィンランドと山口の国際文化交流を下敷きに企画された。フィンランドを代表するファッション&テキスタイルメーカーであるマリメッコ本社からの布地提供を受け、それを使用して制作したコレクション、上記の新留直人によるクリスマスファッションショーのためのコレクションおよびロバニエミのサンタクロース村訪問から着想を得た、サンタ・ファッション・コンテストの実施などを行った。

以下では、交流を行った事例を紹介し、そこで創作された作品とそのコンセプトを記す。（文責：水谷）

2. UIAHとの交流

水谷は2002年4月から9月まで、ヘルシンキ芸術デザイン大学大学院のピイッパ・ラッパライネンPiippa Lappalainen教授のもとに滞在し、授業科目「衣服における民俗・エコロジー・デザイン」に参加して、チームティーチングによって講義、演習、実習等を担当した。山口県立大学代大学院で担当していたゼミ生には、あらかじめこのテーマで作品指導をしておいた。そして、5月に実施された卒業・修了制作のためのファッションショー「HIMO」に、山口県立大学大学院の学生2名の4点ずつの作品を参加させてもらい交流を果たした。ここでの交流内容について、以下に高島海に語ってもらう。

①UIAH主催、卒業・修了ファッションショー「HIMO」に参加

山崎忠道と高島海は2002年5月9日に、ヘルシンキ芸術デザイン大学の卒業・修了制作ファッションショー「HIMO」へ参加するため、日本を発った。ヘルシンキ芸術デザイン大学では、水谷由美子教授の指導のもと、研究室と実習室の使用許可を頂き、作品制作の仕上げを行った。その際に使用、見学させていただいた同大学の設備の充実していることに驚き、高度な教育の環境に非常に感銘を受けた。

このファッションショー「HIMO」は、2002年5月22日、同大学の地下にあるスタジオにて、午後3時、7時、9時からの3回行われた。このファッションショーはヘルヤ・テンヒアラHeljä Tenhiala講師の指導のもとで、同大学の学部学生によって運営されており、モデルや使用する靴の手配およびステージのデザインに至るまで学生が準備に当たっていた。

モデルはヘルシンキ市内のモデルエージェントに属するプロモデルが、まったくボランティアで協力参加している。数日前に一人ずつモデルが大学を訪れ、そ

それぞれの仮縫いをすませる。リハーサルは前日に簡単に行うだけで、当日を迎える。我々はそれぞれ4点の作品をモデルに着用してもらい、仮縫いを行って当日の発表に備えた。

学生がプロのモデルに作品を着用してもらって、発表の場を得るということは、日本においてはなかなか経験できるものではない。我々自身も、これまでに行ってきたショーでは、学生や友人の協力によるアマチュアのモデルにしか服を着てもらったことはなく、初めての経験で、プロモデルの意識の高さに触れることができた。このモデルの肉体に対する意識、服を着るといふことに対する意識の高さが、いかに服を美しく見せるか、ということ自身を自身の作品を通じて知り、大きなショックを受けた。これはとても貴重な体験であった。

ここで発表した作品のテーマは、「Nora」（高島海）、「Basara」（山崎忠道）である。「Nora」は、日本の着物をもつ仕事着としての一面に注目し、「野良着」に着想を得てデザインした作品である。古着の肌襦袢を解いて再利用したり、染色や刺し子、洗いの加工を施して制作をした。また、「Basara」は、中世の日本で流行した、華美で派手な装いをし、傍若無人な振る舞いをする「娑婆羅」の美意識を表現した作品である。これらの作品には金や銀、赤と黒というような色の組み合わせに、異素材を用いることで独自の表現を試みた。

3回におけるショーは、いずれも立ち見が出るほど盛況であった。同大学大学院のピ IPPA・ラッパライネン教授や学部の講師の方々から、よい評価を受けた。また、当日ショーの後に、フィンランド唯一の全国紙である「ヘルシンキ・サノマツ」紙の記者より、筆者の作品の撮影希望があり、取材を受けた。残念ながら、記事にはならなかったが、日本文化に対する関心の高さを知ると共に、ある一定の評価を得られたことを実感した。ショーでは、一人一人の制作者の名前がスクリーンに映し出され、発表が終わるごとに観客からは拍手が起こる。ショーを見た友人からは、我々の発表の後は観客の反応が同大学学生のそれとは違っていたことを聞いた。また、このショーの準備から当日の参加を通じて、多くの学生と知り合うこともできた。彼らと触れ合う中で、彼らの制作に対する意識、意欲を感じ、よい刺激を受けた。

以上のように卒業・修了制作発表として行われたファッションショー「HIMO」に参加したことは非常に実り多いものであった。この経験は今後行う自身の制作、ファッションショーの企画、運営にも役立つであ

ろう。

また、同大学では、年度終了時期であったため、講義等を見学することはできなかったが、多くの展示会が催される時期であった。同大学大学院の修了制作展や、学生による家具・インテリアの展示、ビジュアルデザインの展示などを鑑賞した。さらには、同大学によるものだけでなく、フィンランド国内企業のデザイン展示、また、他大学のファッションショーも見学することができ、スカンジナビアデザインに直に触れることができた。この体験からは多くのインスピレーションを得ることができた。

なお、この短期留学はスカンジナビア・ニッポン ササカワ財団の助成を得て実現した。この場をお借りして、関係諸氏に対し厚く御礼申し上げたい。

（文責：高島）

以上のファッションショーへの参加の成果は非常に大きな成果を得た。高島が上で報告しているが、ファッション&テキスタイル研究科長ヘレナ・ハイヴォネン Helena Hyvönen 教授は、今回の交流活動に大きな意義があったと感想を述べてくれた。

②UIAHの教育と大学院修了展に選抜されたノーラ&ピーアの作品

2001年に開催された第2回ジャパンファッションデザインコンテスト in 山口において招待されたノーラ・ニイニコスキは、2000年よりピーア・リンネと共同でコレクションを発表している。彼女については以下のコンテストの項に詳しく触れるので、ここでは省略する。UIAH大学院修了展は、選抜方式で大学院修士修了学生の中で優秀な作品だけが、学外の審査委員によって選ばれ展示される。この展示会はヘルシンキ市立デザイン美術館で2002年5月15日から8月4日まで展示された。この展示空間も審査委員の一人によってデザインされ、全体に学生の展示会とは思われない高いレベルの結果であったことに驚かされた。

この大学の特徴として、ファッションをはじめインテリアや家具の作品は、工場で作られたものが多く、産学共同創作研究が浸透していることがわかる。それ故に、完成度が高くすぐにでも商品として売られてもおかしくないものが多い。

また、ファッションに関しては、デパートとの共同開発ですでにデパートの店頭で、販売あるいは販売計画されているものも展示されている。UIAHの教育は、非常に実践的であり、また企業との親密な関係のもと、

学生は非常に高レベルの製作環境が与えられている。学部学生の中にも、すでに自分のブランドを持ち、オンラインショップを開店している学生がいて、日本にも作品を輸出しているそうである。

こうした状況にジャンルを問わず、学生でありながらプロとしても仕事をするというUIAHの学生気質が反映されている。また、ノーラ・ニニコスキのように、イタリアでベネトンのデザイナーとして経験を持った後に、大学院に入り直し、また一からクリエイションに挑んでいるものもいる。また、後に紹介する新留直人のように、インテリア・建築と家具の学科の大学院生でありながら、ファッションデザイン学科の学部生をするというように、複数の専門を同時に学習するという人もまったくの例外ではない。

UIAHとの交流を考える時に、この大学のこうした特性をまず理解しなければならない。つまり、ここで言いたいことは、YPUをはじめ、日本の大学とUIAHとは学生の年齢や質が大きく異なっているのである。UIAHの場合には、ほとんどの学生のプロ意識が学生の時代から非常に強いのである。前述したようにすでにプロの経験をして来た者や学生をしながらプロとしてもビジネスをしている者が多いのである。それ故に、学生と言っても学習するあるいは創作するという姿勢が自ずと異なっている。

筆者が長期滞在をしていた間に、日本から多くの大学教授がこの大学を訪問して来て、話す機会を得た。そこでは、皆が一様に学生の異常なまでの目の輝きに驚くと話していた。上記の大学主催のファッションショーや展覧会において、外部の審査委員を招いたりするなど、審査を通じて優秀なもののみ、参加させるという方法をとっている。それ故に、自ずと競争原理が働き、質も上がるのだろう。もちろん、ファッションデザイン学科の入学率は受験生の3パーセントということで、優秀な学生が入学しているという事実が前提にある。さらに言えば、フィンランドではUIAH出身でないとデザイナーにはなれないと言われている程で、学生の自覚と誇りも大きいに違いない。

付け加えて言えば、日本の学生の多くがアルバイトに余念がないのに対して、この大学ではほとんどの学生が基礎的な奨学金がまず全員に支給されるために、アルバイトをしなくても最低の学生生活はまず保証される。そのために、学業に集中できるという背景がある。さらに授業料は無料である。こうした背景から、大学院への進学も経済的には容易である。異なった制度を持つ国の大学を比較することは、かなり無理があ

るが、創作を支える文化背景などから、その違いなどを押し量ることはできるはずである。

それでは、以下にヘルシンキデザイン美術館で展示されたノーラ&ピーアによる修了コレクション「Luuluu」に関して、ノーラの記述を引用することにする。
(文責：水谷)

The Concept of recent work for the Design Museum last summer. MA-degree collection, exhibition title Luuluu. Designers Piia Rinne & Noora Niinikoski. Shown at the joint exhibition of the 2002 graduates of UIAH in the Design Museum in Helsinki, May 15th-August 4th 2002. Luuluu clothes are part of a larger and still ongoing project. The project deals with the openness of the design process. The attitude is based on the relationship of knowledge and unknown. The aim of the project is to produce multiplicity that produces a finally coherence whole. Each small part is equal and related to various sources. The work is based on continuous research of intimate atmosphere. The work is a matrix of relationships. The interesting point in designs exists in between things. The IN BETWEEN is the space that consists the unknown accidental and surprising element. We aim to catch this uncontrollable and use it as the creative focuspoint of the design work. We work by framing something. For example fabric and technique. Then by using the diversified research material we aim to transform the imagined atmospheric world on fabric. For example DADA-kabaree combined with GLAM-rock. We are curious or the result that is produced by odd combinations. We like to work without knowing exactly how the final product will be. In fact the main point of the work is to develop a mutating creative base from which the unexpected ideas may rise. The aim is to give a shape of wearable fashion for these all the time emerging ideas. At the Design Museum exhibition we showed 4 outfits. These were selected items from Cotton collage serie and oldstyle blouse serie. Cotton collage clothes were made by creating random compositions of geometric fabric pieces in between two identical garments. Garments were topstitched and cut. Finally some areas were taken off, in order to create a decollage textile surface.

Collage clothes are based on the technique used widely by artists. First among dadaists and surrealists in the beginning of the 20th century. The old-style blouse serie was produced of the same cotton as used in collage garments. The old feminine “fin de siècle” blouses combined with the collages aimed to recapture the imagined spirit of the early days of Dada.

③UIAHでの授業を通じて

水谷は、UIAH滞在中に自身が企画・演出したファッションショーのビデオを用いて、活動のプレゼンテーションを実施した。

2002年4月に実施した授業では、「大内のコスモロジーを着る」(1996年、山口市、常栄寺雪舟庭において)をプレゼンテーションした。ここでは、教員と学生の両方が授業に参加したが、「幻想的な内容に感銘を受けた」という言葉が返ってきた。パイッキ・プリハPaikki Priha教授は、「我々のショーは、かなり商業的なものだ」と謙遜して、ビデオ交換で上映することをためらった。

日本でのファッションデザインの指導は、アートの傾向が強い。UIAHの教育の特徴は、ファッションをプロダクトデザインとして位置づけ、産学が密接に関わりながら教育をしている点に特徴がある。かえって非常に新鮮な感じを得た。今後のファッションデザインの指導に、プロダクティブな発想を導入しようと考えよいきっかけになったと言ってよいだろう。

その他、筆者の「日本の着物」の授業は、研究科を越えて教職員と学生が受講した。平安時代の着物に託された美意識や染織の歴史などを、多くのスライド資料を用いて、英語で授業を実施した。300枚以上のスライドをパワーポイントで作成した。その時に、東京国立博物館や京都国立博物館また京都風俗博物館などが、インターネットで視覚資料や解説を日英の2カ国語で配信していることを知り、インターネット上の視覚資料が非常に役立った。

当大学内外の聴講者の日本文化に対する関心が高いことに驚かされた。図書館にも英語の文献はたくさんあり、フィンランドの人々が日本の伝統文化に関する情報を得る環境にあることを知った。特に、理論担当のプリハ教授は、今までに断片的に理解していた事象の、筋道を理解できたという反応を頂いた。着物は現代の若者の間で自由に着られる状況になり、古着を中心にトレンドとして注目されている。フィンランド人

の中には、本格的に着物を着ている人もいるが、一般には着たいと思っても約束事がわずらわしく、躊躇している人がいるようである。現代日本の若者も同様の立場に立っている人が多いが、最近のトレンドで、古着を洋服感覚で着る傾向が一般化してきて、伝統に対してようやく解放されようとしている。実際の着こなしを雑誌等で多く見ることができるとは、そのコーディネートはまるで外国人が着物を着る感覚に似ている。

また、「ジャポニズムとネオ・ジャポニズム」に関する授業を行なった。ネオ・ジャポニズムのパートで、三宅一生、山本耀司そして川久保玲などの作品をスライドを用いて、彼らの造形哲学やデザインの特徴を説明した。特に、彼らの作品の一端に見られる「いき」の美学などを説明した。それによって、日本の着物文化と現代ファッションデザインとの関係の一側面が理解されたようである。

特に、三宅一生のブリーツ作品を多く持っていったので、学生たちの反応はかなりあった。彼らは授業終了後には興味深げにブリーツテクニックを観察したり、独特の縫製テクニックを見たり、触ったりして、いろいろと質問して来た。

他にも、授業終了後、ある教員が興奮してかけよって来たことには驚かされた。異文化のファッションについては、視覚的な情報はあがるが、その国の文化背景との関係からその服の意味を読み解くということは、現実的には容易でない。しかし、実際はそうした理解なしには、そのデザインの良さや独創性を味わい見抜くことはできないのである。

我々が北欧のデザインを見るときも同様なことが言える。今回は、ヘルシンキにある国立博物館やユバスキュラの服飾博物館およびトゥルク王宮博物館などで、フィンランドの民俗衣装を調査してきた。サーミ族の衣装にかなりの種類があり、色や形に独特の特徴がある。北極文化圏というものがあり、それらとサーミ族の文化は関係を持っている。フィンランドの民俗衣装は、北欧や中欧さらにロシアの民俗衣装などと関連しつつ、かなり細分化されて発達している事実を知った。

日本とフィンランドでは現代ファッションに関しては、それぞれ相互に情報が流通しつつある。しかし、民俗の伝統や服飾は、あまり知られていないのが現状である。またこの問題は、場所を改めて課題として取り組みたい。

最後になるが、タンペレやユヴァスキュラにおいて現代人が身につける各地域の民俗衣装が製造されているが、その企業とUIAHは交流がある。また、民俗を代

表する叙事詩「カレワラ」に因んで、宝飾品や民俗衣装を扱っている、カレワラコルというメーカー兼小売り店が有名である。ラッパライネン教授は、こうした会社と大学との共同研究を進める活動をしておられ、学生に工場生産による作品製作の機会を与えている。

現在、筆者と地域のアパレル産業である山口県繊維加工協同組合との信頼関係が生まれ、一方で筆者はファッションコンテストの実施に協力しているが、他方でブルーウェイ株式会社との間で、商品開発の共同研究が進んでいる。商品開発プロジェクトが、さらに充実して大きなプロジェクトになるよう、期待している。
(文責：水谷)

3. ジャパンファッションデザインコンテスト in 山口 開催による国際交流の展開

テーマ 「メイド・イン・ジャパン」

課題 「デニム」

審査員 毛利臣男 (空間演出家)

我妻マリ (ファッションコーディネーター)

大鳥居幸男 (ファッションデザイナー)

日時 第2回 2001年12月4日 PM 3:00~6:00

第3回 2002年12月8日 PM 3:00~6:00

場所 ばるるプラザ山口

主催 ジャパンファッションデザインコンテスト
in山口実行委員会

共催 山口県繊維加工協同組合

産学官の連携によって2000年に産業、地域、人材の活性化を目的に創設された全国対象の山口発信イベントであるが、2001年より2部として招待ゲストコーナーが開設された。この年フィンランドのヘルシンキ芸術デザイン大学大学院生のノーラ・ニニコスキー女史を招待した。元ベネトンのデザイナーであった彼女は、テキスタイルデザイナー、ピーア・リンネ女史とのコラボレーションにより、ヘルシンキの何気ない都市風景をグラデーションのある生地プリントで取り込み、北欧のイメージである透明感とソフトなシルエットの作品を発表しその完成度の高さが会場を魅了した。このステージの通訳はイギリスより国際交流員として来山中のロバート・クーパー氏、コメンテータはヘルシンキ美術館と親密な関係にある山口県立美術館の研究員河野通孝氏であった。

2002年の招待ゲストは山口県立大学水谷教授がヘルシンキ芸術大学の客員教授として渡欧した縁で、日本

人の父とフィンランド人の母を持つフィンランド国籍の新留直人氏が招待ゲストとして来場した。インタビューには、フィンランドデザインに詳しい山口県立大学助教授の井生文隆氏をお願いした。新留氏は2001年にヘルシンキ芸術デザイン大学インテリア建築および家具デザイン学部の学士を終えて、現在修士課程に在籍している。同時に、ファッションデザイン学部に進学し、今学期で卒業を目指している。

学部在学中よりさまざまなデザインプロジェクトを手掛け、主に空間ディスプレイ、ブティック、サウナコンセプトの作品がある。2001年にはデンマーク名門デザイン事務所スタジオ・コンプロットで修業、家具のディテールやコンセプトデザインを担当。1999年よりファッションデザイン活動を開始、イケイケファッション・インスタレーションなどが好評となりマスメディアにも取り上げられた。その後2002年フィンランド最高のファッションデザインコンテストで最優秀賞を受賞、若手ファッションデザイナーオブザイヤーに選ばれた。その他3人のデザイナーと共に、カップコミュニティを設立し、デザインを考慮するだけでなく、環境問題や未来社会に対する提案に努力し幅広い活動を志している。

作品のコンセプトは「やさしさ」をテーマに都市のギスギスした中でストレスを受け続けている現代人に、安らぎを感じられるファッションを目指している。色彩的にはアースカラーを基調としたもので統一され、造形的には身体を締め付けない、ゆったりとしたものであるが、ルーズにならないように直線を取り入れて緊張感を出したデザインで、機能的には面ファスナーを積極的に取り入れ調節機能を持たせ、ユニバーサルファッション的な着脱の容易さも付加されている。

総合的に知的で完成度の高い、いかにも北欧らしい合理的なデザインは、第1部のコンテスト参加作品における、繊細で情緒的な日本的なものとは文化背景による差異を対象的に際立たせ、非常に興味深いものとなった。同じコンセプトにおいても、その地域、国の文化背景によって表現が異なることを尊重しあうことが真のグローバル化であり、文化を進化させるためにも国際交流に具体的な形をともなった視覚的なものが、いかに重要であるかを考えさせられたステージであった。そういう意味では今後、当コンテストが日本の代表的なファッションコンテストになって行くにつれて、第2部の招待ゲストコーナーの果たす、国際交流に於ける意義と影響は大きくなっていくと思われる。
(文責：岡部)

以下には、ジャパンファッションデザインコンテスト in 山口で、ゲストとして招待された2組のデザイナーの作品解説を、当事者に語ってもらうことにする。新留氏に関してはインタビューを含む記事をも掲載している。ここではあえて訳さず、英語で掲載することをご了承願いたい。

①'FOOLS GOLD', by Piia Rinne & Noora Niinikoski

University of Art and Design Helsinki, Spring 2001
The Concept of Fools Gold-mix of everyday and glamour

Styling : 20's, 50's and 80's

Inspiration : -our everyday environment

-historical (20's) and exotic glamour

Materials : -denim

-100% wool

Textile designs : Prints : Helsinki seaside and urban environment photos discharge printed on denim and knitted wool. Sketchy line drawings of cars, faces, dogs and written notes added accidentally on top of photoprints. Embroidery : Some areas of prints filled with sequins, sequin rainbows, embroidered mountains and flowers. Knitwear : Based on the research of evening wear and "primitive" festival wear. For example : 20's charlston partydresses with fringes, North American indians fringe leatherwear, african traditional festival wear.

The aim : Aim was to create rich fabric by using chance method. The shapes for clothes emerged automatically from the treated textiles.

②'The experience in the Fashion Contest in Yamaguchi', written by Noora Niinikoski

In May 2001 I was invited by Professor Mizutani Yumiko to participate the Fashion Contest in Yamaguchi the following November. Together with Piia Rinne we had just finished a denim/knitwear collection Fools Gold. A happy coincidence was that the theme for the Yamaguchi Fashion contest was as well denim.

August-December 2001 I studied at Tama Art University as an exchange student, so I flew to Yamaguchi from Tokyo. I felt really excited about this given opportunity to visit an another side of

Japan. I arrived on Saturday and stayed until Monday. From the very beginning I had wonderful feeling in Yamaguchi. I met lots of nice people. The Fashion Contest was very well organized. The lectures given by the members of the Jury were interesting. On the day of fashion show, I was amazed of the amount of participants of the Contest. The Theme for the contest was strictly defined DENIM, which I found was very good. On the other hand the participants had freely experimented the possibilities of this common fabric. The result was amazing amount of denim creations packed with quite endless amount of creativity.

For me as a foreign designer, it was very interesting to see the many faces of japanese emerging fashion design. In my opinion the design language of the chosen works was strong. Denim had been treated in many ways...printed, torn, appliqued, bleached, pleated... The styles varied from fantasy costumes to very wearable clothes. It was very joyful to witness the diversity of new creativity.

③'Akvavit' by Naoto Niidome

A record of 40 entries were sent to the Young Designer of the Year 2002 competition, organized now for the eight-time in connection with the Helsinki International Fashion Fair. Although the Jury was pleased with the high quality of this year's entries, the winner was chosen unanimously.

The winning outfit, Akvavit, designed by Naoto Niidome, 27, a student in the University of Art and Design Helsinki, is a praise for the shell-suit, the practical piece of active wear loved and hated by the Finnish people! The work is spiced with Naoto's wry sense of humour, and the not-so-stylish suit has been transformed into fresh, girlish, aesthetic pieces of clothing. The outfit consists of a windproof jacket, shirt and a skirt made of laminated polyester-fabric which are softened with the cotton fabric of the lining.

The chairman of the jury, fashion editor Jaakko Selin finds the work as materialization of all the criteria needed in a good work ; aesthetics, innovation, trends, knowledge in the materials, wearability and commerciality. "The outfit isn't over-trendy,

but definitely modern. Naoto's work was completed with a good philosophy and sense of mood. The way that he keeps the whole collection in mind, not just the sketches of the one outfit sent to the competition, was exceptional among the competitors."

A student in two fields, of design :

The Helsinki-born Young Designer of the Year spent the most of his childhood in Japan, the home country of his father. The cultural influence of both of the countries can be seen in his work, Finnish and Japanese roots are combined into an exciting combination of pure and simple form, function, origami-styled solutions as well as changing materials and techniques.

Having studied in the Department of Interior Architecture and Furniture Design of the University of Art and Design Helsinki since year 1996, he felt the need to approach the hectic world of fashion and started his studies in the Department of Fashion and Textile Design year 1998. Many similarities between these two fields of design can be found.

"Fashion and furniture design have many common elements such as in pattern-cutting or in the way that a garment or a piece of furniture surrounds and supports the body", Naoto says. A clear vision of the relation between a garment and the space surrounding it has been the source of inspiration for example in the designer's fashion show-installation in the Ike-Ike popular culture-event year 2001, as well as in his catwalk design-projects. Surrounding moods and feelings as sources of inspiration :

Naoto Niidome's studies in fashion design have included a variety of different projects in design for both men and women. The collections have included such experimental pieces as a shirt cut from silicone and a woollen coat for men with an unusual technique of casting the material into a mould. The best ideas are born from the surrounding moods and feelings but important sources of inspiration have also been the field trips made around the world, not forgetting the influence of New York and St. Petersburg as well as the life and works of such great names in design as Alvar Aalto (1898-1979), Kaj Franck (1911-1989) and Vuokko Nurmesniemi (1930

-).

*from 'A man takes the win for the first time : Naoto Niidome is the Young Designer of the Year 2002', extracted from Press release of The Finnish Fair Cooperation, Communications Office, written by Ms. Ulla Perasto, 19 August 2002, including the interview with Naoto Niidome

2002年8月にフィンランドのファッションデザインのコペティションで最高の賞である「Young Designer of the Year 2002」を受賞し、ヘルシンキ国際ファッションフェアにて表彰された。

受賞した作品のタイトルは、「Akvavit」で、「エレガントなウインドブレーカー」を作ることをテーマとした。一般的にファッションには無頓着なフィンランド人が最も愛用する、あのグサイ「ウインドブレーカー」を、機能性はそのままに、もっとカッコよくおしゃれにしようというのが今回の作品提案である。

雨風を遮断するために外側にラミネートされたポリエステル製のファブリックを、肌触りをソフトにするために内側にコットンを使い、その2重構造の面白さを形の特徴として表現している。また、通気性をよくするためにゆったりめのカットにした。

「ラブユフラ (Rapujuhla=ザリガニを茹でて食べるパーティー。フィンランドの夏の風物詩のひとつ)」のようなオープンエア・パーティーに参加するとき、天候の変化や汚れを気にすると、いわゆる「ウインドブレーカー」を着ることになるけれど、もっとおしゃれに装って行けるようにしたかった。ラブユフラを食べる時には、アクアヴィットが飲まれる。ファッションの作品にお酒の名前を付けてユーモラスな表現を試みた。

最後にデニムのコンテストでの招待作家として紹介される作品3点は、ストライプ模様のあるデニムを用いて制作した。20歳前後の女性をイメージしたが、フードの形状などディテールにかわいらしさを表現した。日本人の作品に触れたが、日本のポップカルチャーがデザインに混ざり合っているという印象を持った。また、作品のディテールにおいて刺繍など種々の手業によるテクニックが施され、日本人固有の繊細さが表現されていて興味深かった。(文責：新留)

3. ルネサンス・山口Vol.VII

CHRISTMAS FASHION SHOW - Exchange of Finland and Yamaguchi - における交流

CHRISTMAS FASHION SHOW —Exchange of Finland and Yamaguchi— は、やまぐち文化発信ショップ運営委員会の主催で、2002年12月22日に昼の部は、「まちの駅」（山口市米屋町商店街）そして夜の部は「中市コミュニティホールNAC」にて開催され、550名程度の観客に観賞された。

今回は、山口市で「日本のクリスマスは山口から」というキーフレーズで、すでに活動されて来た市民活動の流れを受けて、世界的に有名なサンタクロース村（ロバニエミ）があるフィンランドを国際文化交流の対象として注目した。作品制作においては、フィンランドを代表するファッション・テキスタイル関連企業マリメッコ社から、我々のファッションショーの意義に賛同を頂き、空輸により生地提供を受けた。さらにヘルシンキ芸術デザイン大学大学院生を招いて、学生や市民との交流を図った。

市民参加型「山口・サンタ・ファッションコンテスト'02」も同時開催して、広く山口の歴史的文化背景への興味を喚起するとともに、山口の服飾文化を豊かにし、それらを全国および世界に広く発信することを目的とした。また、商店街の関係各位との共同主催をすることで、商店街の活性化も視野に入れた内容にした。このコンテストには、山口県立大学以外の大学や高校さらに一般の人々が多く参加し、広がりが生まれて産学官の皆様から大いに評価を受けた。（文責：水谷）

①クリスマスファッションショーのための現地調査と交流

フィンランドにおけるサンタクロースに縁の場所を求めて、水谷教授と高島海そして筆者の3名は、フィンランドの北部、ラップランド地方のロバニエミに行った。ロバニエミは北極圏の入り口に位置している。そこで、ロバニエミ日フィン協会事務局のシルパ・オヤラSirpa Ojala女氏に会い、ロバニエミを案内してもらった。

まず、サンタクロース村に連れて行ってもらった。1年中、世界からやってくる観光客を迎えるために4人のサンタクロースがこの村にいる。その内の一人のサンタクロースと話をした。そして、我々のファッションショーのために、写真とビデオ映像を特別にとらせてもらった。

このサンタクロース村には郵便局があり、そこへクリスマス日にサンタさんからクリスマスカードが送られるようにと希望のハガキが届けられる。そして、12月24日頃にここから心待ちにする人々にクリスマス

カードが送られるのである。ここは世界のサンタクロース文化の重要な拠点である。この村にはロバニエミの地元の工芸品やファッション商品などを売る店がたくさんある。サーミ族の工芸品も多い。シルパさんのおかげで、トナカイの毛皮の見分け方を知ることができた。真っ白なトナカイはめずらしく、もっとも高価だそうである。

次に、ロバニエミを展望できる、小高い山に連れて行ってもらったのだが、その途中で道路を横断するトナカイと出会うことができた。私達は彼らを野生のトナカイだと思っていたが、聞くところによるとトナカイは、飼い主がきちんと定められていて、野生のトナカイはほとんどいないということだ。

そして、ロバニエミ日フィン協会会長であり、またラップランド大学事務局長でもあるユハニ・リルベルク Juhani Lillberg氏のお宅を訪問し、こちらの人々の暮らしや、大学の状況などを、現地の人から聞くことができたのは貴重な経験であった。訪問したのは6月上旬だったために、家族の方はこちらのライフスタイルらしく、400キロ南下した場所にあるサマー・ハウスに出かけておられ、仕事忙しいユハニ氏だけが在宅しておられた。週末には合流される予定と聞いた。

また、後日ではあるが、ロバニエミをさらに北上する場所に位置する、イナリ市を高島と二人で訪れた。ここにはフィンランドの先住民族である、サーミ族の博物館があり、サーミ族の生活形式や衣服、またサーミ人の暮らしていた環境をよりよく知ることができた。

今回のルネサンス・山口のタイトルがクリスマスファッションショーということもあり、照明や雰囲気作りなどに、フィンランドでの現地調査の経験を生かすことができた。フィンランドでは、客を招いてのパーティーを家ですることが多い。そういう時は、ほとんど人工照明を使わずに、ロウソクの光だけで空間を演出するのが一般的である。そこで、ファッションショーの入り口への導線などに、水の中に浮かせたロウソクで案内の光の道を演出した。

クリスマスとフィンランドとの結び付きをご存じない観客の方からは、なぜフィンランドなのかなどの疑問が寄せられたが、ショーの後では雰囲気を味わってもらい、理解してもらったようだ。

またクリスマスファッションショーに、フィンランドで親交のあった新留直人氏をゲストとして招くことができた。彼は日本人の父とフィンランド人の母を持つダブルなので、日本語が話せるために、我々がUIAHでファッションショーに参加するときに、テンヒアラ

先生の紹介で支援を受けた。現在ヘルシンキ芸術デザイン大学のファッションデザイン学部の学生である。また、フィンランド最高のファッションデザインコンテストである若手ファッションデザイナーオブザイヤーの最優秀賞を受賞した、フィンランドで最も注目すべきデザイナーである。

彼の物作りの姿勢や、作品に触れることができたことは、学部生、大学院生ともに大きな刺激となった。

(文責：山崎)

②マリメッコ社提供素材によるコレクション

2001年9月に初めて渡フィンした時に、アルヴァー・アールトの写真家であるヤリ・イェットソネン Jari Jetsonen氏のアレンジのおかげで、ヘルシンキ郊外にあるマリメッコ本社を訪ねることができた。ヘルシンキの目抜き通りであるエスプラナーディ通りに3軒ほどの店舗があり、すでにマリメッコの存在は知っていたが、本社ビルに装飾された色鮮やかで大柄、あるいは巨大柄とも言える花柄に圧倒された。

一般に北欧のデザインのイメージは、それほどカラフルな印象はない。しかし、実際にマリメッコの他、アンニッキ・カルヴィネンなど、フィンランドを代表するメーカーの表現する色彩は明るい。フィン・カレリア社を訪れて、社長に自社の世界戦略における色表現を聞いたが、フィンランド人は濁った色を嫌い、鮮やかな色を好むということだった。

このフィンランドを代表するテキスタイルを使って、いつかファッションデザインをしてみたいと考えていた。2001年12月にパイッパ・ラッパライネン教授が、マリメッコ社に紹介するというので、同伴して頂き、再度の訪問を果たした。その後、クリスマスファッションショーへの生地提供をお願いするために、2002年5月に高島と山崎をも含めて、同教授が再びマリメッコに同伴して下さった。コミュニケーション部長のマルヤ・コルケラ Marja Korkeela 女氏が交渉の窓口になって下さった。その後、輸出部門マネージャーのサンナ・リップネン Sanna Lipponen 女氏とインターネットで再三の交渉を繰り返した。日本でマリメッコを輸入している企業（エム・アールト株式会社など他2社）との調整などがあり、最終的な結論が出たのは、11月末になってからである。制作をするためには、ぎりぎりの時間であったが、OKがでることを信じて、研究室では企画、デザインを決めて準備を進行させていた。

結果的には、大学院生の山崎と高島は個人テーマの作品「impact of body line」「Japanese mind」を制

作し、3年生の蓬萊、渡辺そして山口はリバーシブルの要素を入れたアクセサリー（カフェエプロン、カスケット、靴）を制作した。4年生の伊勢田、大田、浜崎そして渡辺には、「ポケット・ドリーム」という課題を与え、それぞれにポケットを課題とする作品を制作した。

すでにUIAHで「日本の着物文化」に関する授業を行ったことを述べたが、筆者はフィンランド人の着物また簡易な浴衣への強い関心を感じて、「ネオ・キモノ・プロジェクト」を立ち上げた。松尾量子助手と大学院生岡部泰民とともに、マイヤ・イゾラのテキスタイルデザインによる1960年代の復刻柄ウニコを用いて、ネオ浴衣、ネオ振り袖そしてネオ着物コンビネーションを制作した。このプロジェクトでは、帯を前で結んだり、表裏のリバーシブル的素材の組み合わせ、同柄の組み合わせや重ね着のおしゃれそして抜き衣紋によるいきの表現などを目指した。また、特筆すべきことは、着物を縫う手縫いの繊細な技術とデニムなどに用いられる0番手というもっとも太い糸で、袖口や脇などにステッチを入れるという、特異な技術の組み合わせをしている点である。

フィンランドはサウナ文化である。日本の温泉好きと似た文化があり、アフター・サウナの服装は一つの社交をする大切な服装である。今後は、この「ネオ・キモノ・プロジェクト」を発展させて、ヴァカンス用の服装のみならず、アフター・サウナやアフター・スイミングそしてアフター・スパなどの衣服を提案して行きたいと考えている。

花柄やストライプ、幾何学模様などの、色鮮やかな生地がマリメッコ社のテキスタイルデザインの特徴であり、最近では1960年代ブームの再来で、マリメッコも今や古典的になった花柄ウニコや幾何学模様などを復刻している。それらを日本人的な感覚によって効果的に使用し制作された提供素材を用いたプロジェクトの作品は、マリメッコ社の提案商品とはまた違ったイメージを作り出すことができたと思う。(文責：水谷)

4. フィンランド・ファッションデザインの一面

①「ヘルシンキ国際ファッションフェア」

筆者は2002年8月24日～26日にヘルシンキメッセで行われた「ヘルシンキ国際ファッションフェア」を見る機会を得た。このファッションフェアの方法は1日目は、一般客をも入場許可し、今年の秋冬ものを展示し、またファッションショーを実施する。そして、2日目と3日目はプロだけを入れて、2003年春夏コレク

ションを発表し、ブースとファッションショーを通じて顧客を引きつけ、商談をするのである。

ショーとブースとともに、プロの発表の間に、UIAHの学生の卒業・終了制作の優秀な作品が参加を許可されていた。同様に、このファッションフェアが主催したコンテストでグランプリを受賞した新留直人氏のブースが作られた。また、3日目のショーの最初に、表彰式があり、彼は大統領から表彰された。この国がノキアなどのIT産業ばかりでなく、ファッション産業にも力を入れようとしていることが、大統領の行動から伺える。

ここでは紙面の関係があるので、特に詳しくは記述する余裕はないが、フィン・カレリアを例に、フィンランドのファッションデザインの特徴を見てみよう。この会社には後日訪問し、社長から直接話を伺った。この会社はラハティ郊外にあり、イギリスやドイツを始め世界に輸出をしている。工場の中では、糸から製造し、染織、デザイン、パターンそして縫製などすべてを行っていて、驚異であった。ほとんどの国では分業制がはっきりしていて、このような体制を取ることには信じられないことである。しかし、これは素材を大切に、素材とデザインを一体化して個性を出そうとしているフィンランドデザインの典型的な特徴を現わしていると言える。

フィンランド人の体形は日本人に比べると背が高く、全体に大きい。大人になると極端に大きな人が多くなり、ボディコンシャスな服はあまりふさわしくない体形になる。それが理由かは明らかではないが、このファッションフェアを見ると、もっとも大きなデザインの特徴は肩でハングさせて着るルーズフィットが圧倒的に多い。これは驚きでもある。具体的には一枚の布の発想に見られるような構築的な作品が多く、布を自由に造形している特徴があるが、日本の着物と異なり、どこでも締め付けないというデザインが多い。多くの人に話を聞いてみたが、今回はショーのコーディネーターが、着物の帯風のを組み合わせに使っているだけで、基本的にはルーズなデザインには変わらないという意見が圧倒的に多く、フィンランドのファッションデザインの特徴として、ルーズフィットと考えるのは妥当なようである。

それ故に、フィンランドを代表するファッションメーカーの多くの場合、それぞれのメーカーが固有のテキスタイルをデザインし、それをまず大きな特徴としながら、衣服のデザインを提案しているのである。その代表的なファッションメーカーにマリメッコMar-

imekkoがある。

②マリメッコ

マリメッコは、2001年に創立50周年の記念展覧会がヘルシンキ市立デザイン美術館にて実施されたように、半世紀の歴史を持ち、1980年代の社長交代を経て、現在も成長し続けている優良企業として、フィンランド国民に愛されている。大胆で色彩鮮やかな模様や横ストライプ模様で有名になり、インテリアからファッションまで世界に輸出されている。特に1960年代にストライプ柄が、ジャクリーヌ・ケネディの目にとまり、一夏のヴァカンスウェアの一揃いが注文されて以来、世界のモード界に登場することになった。現在では、日本人のテキスタイルデザイナーなどが参加し、新しい模様が次々に創作されている。1960年代以来の模様が復刻され、それらがマリメッコを代表する模様として健在でもある。

前述したが1960年代に有名になったウニッコ柄が復刻されて現代のインテリアファブリックおよびファッションの素材として用いられ売られていることは、注目に値する。一つの柄がよいとなると、定番化しずっと生産し続けられたり、復刻されたりする。

つまり、一つの模様が創作され、一定の評価を受けたものは、増産され続けるということをごここで強調したいのである。イイタラ社のガラス製品やアラビア社の陶器なども同様なことが言える。マリメッコをはじめ、後者のプロダクトデザインの分野でも、それぞれのメーカーは複数のデザイナーを抱えたり、ゲストとして同時代に活躍している若手やベテランの分野を越えたデザイナーを招いている。

コンテストにおいて高い評価を得た作品を、市民のために増産し、コストを下げ普及させるという方法をとっている。筆者が現地を訪問していた間に、ヘルシンキ、ヤルヴェンパー、エスポーそしてロヴァニエミなどの大学教授や知人宅などを訪問したが、そこでは以上に以上に挙げたようなマリメッコのファブリック素材やイイタラおよびアラビアの食器類が使用されていた。

ある一定の型が継続されているので、30年前に購入された同じものが現在も店舗で売られているのである。つまり一般に「サステイナブルデザイン」と呼ばれている継続性のあるデザインが実現されているのである。消費天国と形容してもよい日本社会における、ファッションデザインやプロダクトデザインの現状と比較すると、一つのデザインの持つ意味の重さを感じさせら

れる。また、一般市民が、自国のデザイナーや商品に対して敬意と愛情を注いで止まない態度に感動させられたのである。(文責：水谷)

5. まとめ

実際に、フィンランドのファッションシーンでは、フランスやイタリアのファッションは絶対的な存在ではない。ファッションのメインストリートに、ルイ・ヴィトンもシャネルも軒を連ねていないのである。東京の電車に乗っていると、ここはヨーロッパかと勘違いさせられるように、一般の男女がヨーロッパの有名ブランドの鞆を持っている。

フィンランドは同じEU圏とは言え、日本のようなフランスやイタリアモードの大量消費国ではない。もっとも、ビジネスウーマンなどは、出張の際にフランスやイタリアなどのモードを購入しているという話を聞くが、街を歩く人々には日本で言うところのブランドを持つあるいは着る姿は極めて稀なのである。過剰な流行情報に扇動されるということは、あまりなさそうである。

もちろん消費税22パーセント、最低所得税約30パーセントという破格の税金を支払っている福祉国家である。一方で都市生活と週末のサマー・ハウスという2重の生活を理想とするようなライフスタイルなど、日本とは異なる生活の価値観でフィンランドの人々は生きているように思える。もちろん、歴史、文化、風土、経済そして具体的には人々の体形などから、北欧全般に一つのファッション圏を成していることも事実である。最近、日本でもユニバーサルファッションデザインが注目されており、その事例として北欧に注目が集まり始めてもいる。

西欧のファッションシーンとほとんど変わらない日本に暮らすものとして、改めて北欧の国であるフィンランドの人々の価値観とデザイン哲学を研究する意義が見いだされた。今後、さらにUIAHの教職員や学生そしてプロデザイナーとの交流を継続し、関係を深化させつつ創造活動をして行きたいと考えている。

以上の研究は、平成14年度の東京財団による「教員の海外派遣」奨学事業と山口県立大学研究創作活動助成事業の助成を受けて実現したのもので、ここに付して深くお礼申し上げる。

* クリスマスファッションショーに関する資料

本テーマに関連するパートのみ掲載

スタッフ：

企画・演出・デザイン：水谷由美子

音楽監督・作曲：田村洋

照明・効果：倉田敏文

音響：亀井政一 舞台監督：SATORU

モデル指導：REIKO

ヘア・メイク：サロン・ド・プチ

装置：井生文隆 蔵重伸 鶴田千賀子

グラフィックデザイン：Rivers inc.

ビデオ：原田正美

写真：Baku Photo Office

Web Page：永崎研宣

司会進行：大和良子

制作：やまぐち文化発信ショップ運営委員会

+岡部泰民 松尾量子 高島海 山崎忠道

モデル：

東郁江 斉藤真理子 山下和子 清水優香 清水真梨
黒瀬絵未 高木由香利

小山麻衣子 加納宏美 山田恵子 福原まゆみ

白石悦子 奥田愛 岡本なおみ

藤井香 多田紫 吉田瑞穂 田中麻美 黒木亜衣子

久原可奈子 末岡梨絵 野下さやか 安田幸子

三輪誓子 小笠原桃百子

協力スタッフ：

守山五十鈴 児玉桂子 若林照美 弘瀬里子

新留直樹 伊木功尚 岩男幸 蔵重麻里

Yousuke MIYAMOTO 塩瀬あいり 橋本尚子

岡部広暢 岡部隆則 徳田良樹 野見山遥

鉄川万希子 伊藤文佳 谷井佳代 秋山麻里子

関東帝香 多湖元昭 石田智久 谷口陽祐

森田一郎 吉川栄暢 三原寛子 山本陽子

吉富佐恵

藤本利明（山口市商店街連合会会長）

田村弘紀（山口商工会議所活性化委員会委員長）

飯田裕史（山口商工会議所）

主催：やまぐち文化発信ショップ運営委員会

共催：山口商工会議所 山口市商店街連合会

(有)ナルナセバ 山口県立大学服飾研究会

後援：山口県 山口市 山口県繊維加工組合

山口県立大学

協力：中村女子高等学校 山口市市民活動支援センター

「さぼらんて」 ナバラの会

ブルーウエイ株式会社 山口ミシンセンター

パルーンアート・ポップ 株式会社美恵工芸

プログラム：〈パート1〉

Collection with exchange of Finland and Yamaguchi
フィンランドと山口の交流から生まれたコレクション

Section 1 : Collection with Marimekko Fabrics, donated from Marimekko Co. in Finland

マリメッコ社（フィンランド）提供テキスタイルを用いたコレクション

- 1 : Personal Project 1 個人作品 山崎忠道
Tadamichi YAMAZAKI “impact of body line”
2 works
Textile “KORSI”, designed by FUJIWO ISHIMOTO
- 2 : Small articles Project as accessories アクセサリー・プロジェクト
山口里奈 蓬萊美里 渡辺更紗
Rina YAMAGUCHI “Strawberry casquette”
Misato HOURAI “Strawberry bag”
Sarasa WATANABE “Cafe apron”
Textile “MANSIKKAVUORET”, designed by MAIJA ISOLA
- 3 : Pockets' Dream Project ポケット・ドリーム・プロジェクト
伊勢田江利 大田舞 浜崎加那子 渡辺由美
Eri ISEDA Textile : “KAIVO”, designed by MAIJA ISOLA
Mai OHTA Textile : “KIVET”, designed by MAIJA ISOLA
Kanakano HAMASAKI Textile : “ALBATROSSI”, designed by MAIJA ISOLA
Yumi WATANABE Textile : “ANANAS”, designed by MAIJA ISOLA
- 4 : Personal Project 2 個人作品 高嶋海
Kai TAKABATAKE “Japanese mind” 2 works
Textile : “HEINÄ”, designed by MAIJA ISOLA
Textile : “PISARA”, designed by FUJIO ISHIMOTO
- 5 : NEO KIMONO Project ネオ・キモノ・プロジェクト
水谷由美子 松尾量子 岡部泰民
Yumiko MIZUTANI, Ryoko MATSUO, Yasutami OKABE
“Neo Yukata with the strong stitches”
“Neo Furisode Kimono”
“Neo Kimono with the cotton beating, divided into two parts”
Textile : “UNIKKO” ver. blue / red / green, designed by MAIJA ISOLA

Section 2 : Collection of Guest Young Designer from Finland

Naoto Niidome “VAKO” 4 works
フィンランドからのゲスト・デザイナーによるコレクション 新留直人

- * VAKOはフィンランド語で、溝とか隙間といった意味。コレクションの構造にいくつかの溝や隙間があるので、この名をつけた。また、フィンランドではコールテンをVakosamettiといい、溝の入ったベッチンという意味

Reference :**History of Marimekko**

In 1951, Armi Ratia joined the small oilcloth and textile printing company Printex her husband had set up two years earlier in Helsinki, Finland. Her first job was to leave the oil out.

Armi asked some artist friends to apply their graphic designs to cloth. Along with the check patterns came colossal non-figurative shapes which, together with their daring colours, completely revolutionised the traditions of textile printing.

Though people admired the new, unique fabrics, they did not quite know how or where to use them. In order to show how the fabrics could be used, it was decided to make up a small collection of simply styled dresses.

These were still the grey post-war years of rationing and clothes had to last but Armi wished to give them a touch of beauty and joie de vivre.

<http://www.marimekko.co.uk/index.htm>

MAIJA ISOLA :

Maija Isola started to work for Printex in 1949, for Marimekko in 1951 and continued to design fabrics for Marimekko until 1987. Many of the printed textile designs people identify with Marimekko are by Maija Isola, including the Unikko flower from 1964 which has had a huge revival during the past few years and is now regarded as something of a Marimekko trademark.

The Unikko design is even more popular now than in 1960s and is used for all sorts of products including mobile telephone covers and television sets. Isola designed hundreds of patterns and the archives are still holding more of her vintage work. Maija Isola passed away in 2001.

Ishimoto came to Finland from Japan in 1970 and has lived there ever since. He first worked for the company Decembre, set up by Ristomatti Ratia, son of Marimekko's founders Armi and Viljo Ratia.

<http://www.marimekko.co.uk/index.htm>

FUJIWO ISHIMOTO :

Ishimoto switched over to Marimekko in 1974. His highly personal work gave Marimekko a boost during the 1970s and 1980s with more mature and abstract designs than the playful 1960s styles which first had made Marimekko famous. Inspired by traditional Asian art and culture but also by Finnish traditions and nature, Ishimoto has continued to reinvent himself. In total, he has made over 300 designs for Marimekko. Besides his work for Marimekko, he also creates unique ceramic works and was recently the subject of a large retrospective exhibition in Helsinki.
<http://www.marimekko.co.uk/index.htm>

<パートII>

やまぐち・サンタ・ファッション・コンテスト'02

Prologue: 'Joulun Valot' - 倉田敏文のクリスマス・イリュミネーション

Section 1 : コーディネイト 2名

Section 2 : 創作・グループ部門 14組

Section 3 : 創作・個人部門 9人

受賞結果

グランプリ

「ホワイトクリスマス」

西川英里 (山口県立山口高等学校 2年)

金賞

「幸せのカタチ」

梅野愛子 (山口県立大学環境デザイン学科 2年)

「アストロサンタ」

小笠原桃百子 (山口県立大学環境デザイン学科 2年)

銀賞

「星降る夜にサンタと歩くドレス」

藤井孝子 (伊豆編物教室)

「魔法使いのサンタクロース」

山口県立大学環境デザイン学科 2年 3班

銅賞

「サンタのあこがれ黒いドレス」

堀田三穂子 (伊豆編物教室)

「乙女サンタに感動」

山口県立大学環境デザイン学科 2年 4班

審査委員特別賞

「Cuty & Beauty」

中村女子高等学校 6班: 代表 池田沙織

「サンタの跡継ぎ反抗期」

山口県立大学環境デザイン学科 2年 5班

審査委員

横田健二 / 山田尚子 (山口県文化振興課 課長 / 主査)

内田武義 / 末次和信 (財山口市文化振興財団常務理事 / 山口市商工振興課主幹)

下鐵太郎 / 山崎ハルエ (山口商工会議所 副会頭 / 常議員)

岸田俊慈 / 森生徳美 (中市商店街振興組合 会長 / あいび会会長)

岡部泰民 / 児玉桂子 (山口県繊維加工組合専務理事 / 企業代表・ブルーウエイ㈱)

熊本守雄 / 蔵重 伸 (山口県立大学大学院国際文化学研究所長 / 院生代表)

指導者

佐藤洋子 (中村女子高等学校)

入江幸江 (入江編物教室)

松尾量子 (山口県立大学助手)

水谷由美子 (山口県立大学教授)

クリスマスファッションショーはやまぐち文化発信ショップ運営委員会の主催で行われ、財山口県文化振興財団助成事業・財山口市文化振興財団助成事業として、協力を得られたものである。この場をお借りして、この度のファッションショー開催に際して、多大なご支援、ご協力を賜りましたすべての皆様に深く感謝の意を表したい。



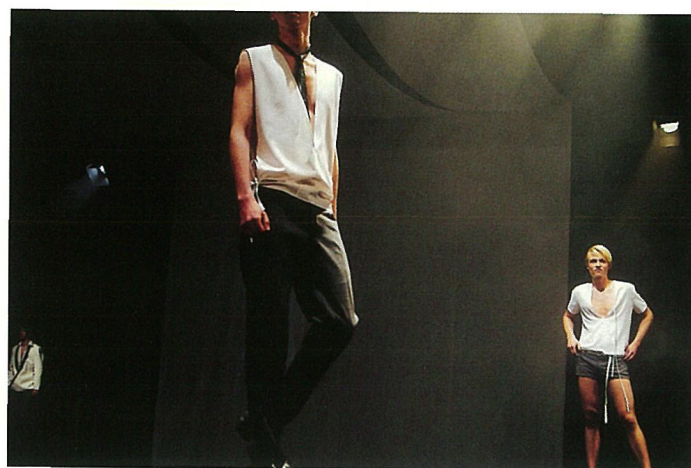
1. 高島海「Nora」UIAH主催「HIMO」にて



2. 山崎忠道「Basara」UIAH主催「HIMO」にて



3. IDBM (デザイン, 経営, 技術を担当する3大学と企業との共同プロジェクト)により発表された作品 UIAH主催「HIMO」にて



4. UIAH学部生の作品 UIAH主催「HIMO」にて



5. 5. - 6. Noora Niinikoski & Piia Rinne 'Luuluu' collection at Helsinki Design Museum



6.



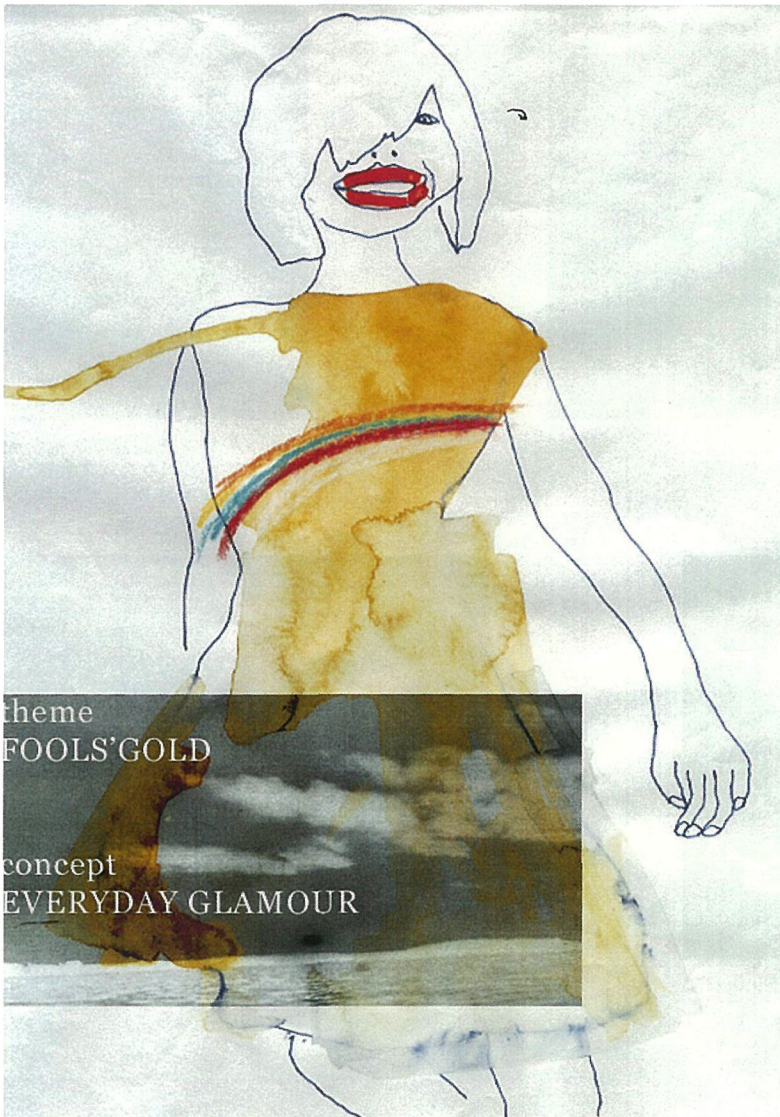
7. 水谷由美子の授業風景 UIAHにて



8. 第2回ジャパンファッションデザインコンテストin山口でのノーラ・ニイニコスキの招待作品紹介コーナー



9. ノーラ・ニイニコスキ



10. 'Fool's gold' デザイン画



11. 'Fool's gold' 作品 photo by Aleks Niemelä



12. Naoto Niidome 'Akvavit' デザイン画
フィンランドにおける2002年若手デザイナー・オブ・ザ・
イヤー・コンテストグランプリ受賞作品



13. Naoto Niidome 'Akvavit' デザイン画と展開図



14. Naoto Niidome 'Akvavit'
上段/スタジオ photo by Paula Kukkonen
下段/ショー photo by Jukka Uotila

'Akvavit'



15. ヘルシンキ国際ファッションフェアのカタログ表紙
2002年8月24日-26日



16. 第3回ジャパンファッションデザインコンテストin山口での新留直人の招待作品紹介コーナー



17. 新留直人とインタビュアーの井生文隆



18. 夏至祭のクライマックス
2002年6月21日ヘルシンキ市セウラサーリにて



19. 夏至祭での民俗衣装と踊り
2002年6月21日ヘルシンキ市セウラサーリにて



20. ピイッパ・ラップライネン教授 (右),
マルヤ・コルケーラ (マリメッコ社コミュニケーション部長/左),
水谷由美子 (中)
マリメッコ本社にて



21. サンタクロース
2002年6月8日ロバニエミ市サンタクロース村にて



22. ロバニエミの公園にいるトナカイ



23.



24.

23. -24. Tadamichi YAMAZAKI "impact of body line"
Textile "KORSI" of Marimekko, designed by FUJIWO ISHIMOTO



25. Kai TAKABATAKE "Japanese mind"
Textile : "HEINÄ", designed by MAIJA ISOLA



26. Kai TAKABATAKE "Japanese mind"
Textile : "PISARA", designed by FUJIO ISHIMOTO



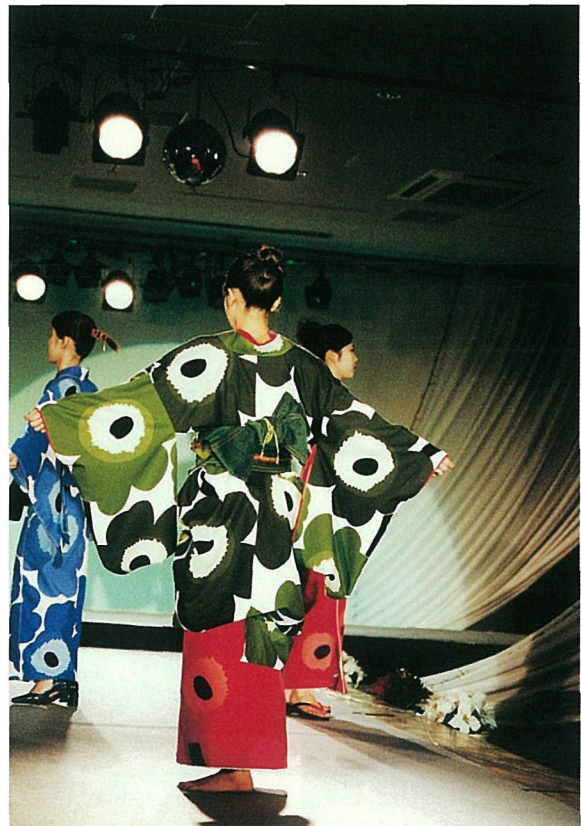
27.



28.



29.



30.

26. -29.

ネオ・キモノ・プロジェクト NEO KIMONO Project

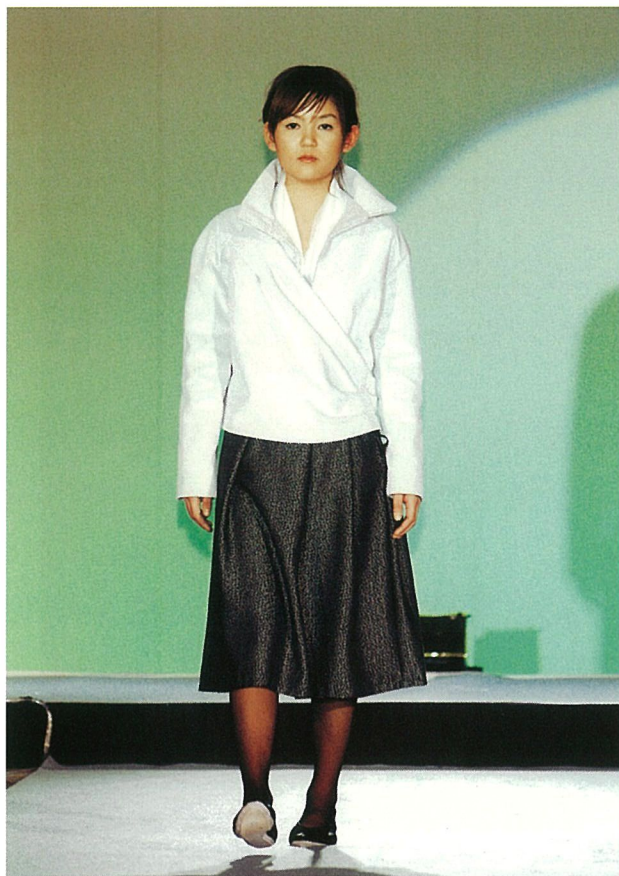
水谷由美子 松尾量子 岡部泰民

Yumiko MIZUTANI, Ryoko MATSUO, Yasutami OKABE

26 "Neo Yukata with the strong stitches" 27 "Neo Furisode Kimono"

28・29 "Neo Kimono with the cotton beating, divided into two parts" Front Back

Textile: "UNIKKO" ver. blue / red / green, designed by MAIJA ISOLA



31.



32.

31. -32. Naoto Niidome "VAKO" at the Christmas Fashion show in Yamaguchi
クリスマスファッションにおける
新留直人の作品「VAKO」



33.



34.

33. -34. 山口サンタ・ファッション・コンテスト'02のショー
米屋町商店街 まちの駅にて



35. クリスマスファッションショーのフィナーレ2002年12月22日 中市コミュニティホールにて(山口市)